

楽  
曲  
紹  
介

解説=小畑恒夫

 $\frac{11}{16}$  |  $\frac{11}{18}$ 

ボーイト (1842-1918)

歌劇『メフィストーフェレ』(プロローグと4幕、エピローグのオペラ)

## ●ボーイトとオペラ作曲の経緯

アッリーゴ・ボーイト(1842-1918)はイタリア人画家とポーランドの貴婦人との間に生まれた。文学と音楽に才能を示したアッリーゴはミラーノ音楽院に学び、優等で卒業。奨学金を得たパリ留学で最先端の文化的刺激を受けた。1862年に帰国すると、ミラーノの芸術運動「スカピリアトゥーラ」の主要メンバーとして詩作に励み、文芸・音楽批評を活発に行った。

当時のイタリアは1861年に国家統一は実現したものの、夢見た理想とはかけ離れた社会になっていた。「スカピリアトゥーラ」は国家統一の理想を掲げた知識階級の第2世代の若者たち、「父親たち」の失望を目の当たりにした多感な若者たちが起こした芸術運動だった。彼らはイタリア音楽の停滞に苛立っていた。ワーグナーの芸術が「未来の音楽」として重みを増してくる中で、あのヴェルデイでさえ庶民的な力とエネルギーを失い、『仮面舞踏会』や『シチリアの晩鐘』などフランス趣味を借用して手軽に作品を作るようになった(と彼らには思えた)。

ボーイトは友人フランコ・ファッチョの野心的オペラ『アムレト』(1863)を推薦する文章の中で、イタリアの先輩音楽家たちを「古い因習にとらわれて芸術を女郎屋の壁のように汚した」と酷評したが、それは彼の本心だったろう。『アムレト』は無残な失敗を喫したが、やがてボーイトは自分のオペラ『メフィストーフェレ』を完成させた。パリ留学時代から構想を暖め、台本も音楽も自分で書いたこのオペラこそ、ワーグナーに対抗できる革新的なイタリア・オペラであるはずだった。

それは1868年3月5日にスカラ座で、ボーイト自身の指揮で初演された。わずか26歳の青年の処女オペラを初演させたスカラ座の決断は、当時の音楽界がどれほどオペラの革新を求めているか、また若いボーイトがどれほど期待される存在だったかを示している。しかしながらそれはスキャンダラスな大失敗に終わる。

革新的な台本を前もって発表したのはリコルディ出版社の戦略だったが、演奏を聴く前から支持派と反対派の論争が激化し、聴衆は異常な精神状態でこの革新的なオペラの初日を迎えたのだった。

自信を喪失したボーイトはしばらく作曲から遠ざかったが、1875年に大々的に手を入れた改訂版がボローニャで初演され、好評を博した。翌76年にはヴェネツィアで再演され、1881年のスカラ座における再演が圧倒的な成功を収め、このオペラの評価は定まった。

ボーイトは自身で初演版(1868)の総譜を破棄したので改訂版(1875)との正確な比較はできないが(台本は残っている)、ファウストをバリトンからテノールに変え、いくつかのエピソードを削除し、全体を短く凝縮した。またアリアに伝統的なスタイルを取り入れるなど、成功を勝ち取るために現実と妥協した部分もあるという。しかしそれでも、『メフィストーフェレ』は高い理想を掲げてイタリア・オペラの現代化に挑んだ音楽家の野心的な傑作と位置づけられるだろう。

## ●物語と聞きどころ

本稿は改訂版『メフィストーフェレ』(決定稿)に基づく。

### 天上のプロローグ

天上で天使たちが神を讃えている〔**第1楽章**〕。そこへメフィストーフェレが姿を見せ、慇懃無礼な口調で地上の人間たちの愚かさを語る〔**第2楽章**〕。すると神がファウストの名をあげる。メフィストーフェレは、学問に励む彼にも弱点はある、誘惑してみせましょうと言ひ、神と賭けをすることになる〔**劇的間奏曲**〕。小天使たちの声が聞こえ、メフィストーフェレは去る〔**第3楽章**〕。地上の悔悟者たち、小天使たち、天使たちの合唱が重なる〔**第4楽章**〕。

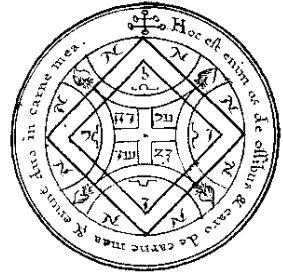
▶プロローグは管弦楽的な発想により5つの部分で構成されている。第1楽章は管弦楽による壮麗な前奏に続いて混声5部の二重合唱。メフィストーフェレが登場する第2楽章は「器楽によるスケルツォ」という副題をもつ。賭けが成立する「劇的間奏曲」を経て、第3楽章は速いテンポの児童合唱。「聖歌によるフィナーレ」の副題を持つ第4楽章は3つの合唱が重なり合い、やがて第1楽章のテーマの回帰でクライマックスに達する。このプロローグは全曲中で最も個性的、しかも成功した部分で、1868年の初演時から好評だった。

## 第1幕

**第1場 〈復活祭の日曜日〉** ファウストと弟子ヴァグネルは散歩をしながら、楽しげに行き交う人々を眺める。夕暮れ時、灰色の修道士を見かけたファウストは悪魔的なものを感じて身震いするが、楽天的なヴァグネルはそれを否定する。

▶復活祭の雑踏と興奮の表現は合唱が受け持つ。3拍子と2拍子が交代する管弦楽も効果的。修道士が出現すると祝祭の気分は消え、バス・クラリネットの半音階がファウストの不安を強調する。

**第2場 〈契約〉** 帰宅して「仕事場」に入ったファウストは、灰色の修道士が一緒に入ってきたのに気づかず、一人瞑想に入ろうとする(アリア「野原から、牧場から」)。しかし聖書を開いた時、隠れていた修道士が大声を上げる。修道士に化けていたメフィストーフェレは今度は騎士姿になる。驚いたファウストに名を問われると、自分が悪魔であることを明かし(アリア「私はすべてを否定する霊です」)、世界をあざ笑うように口笛



魔術書『ソロモンの鍵』に見られる悪魔除けの護符(ペンタクル)

を吹く。どんな望みも叶えますよとメフィストーフェレが言うと、人生に倦んでいたファウストは魂の安らぎを求める。「止まれ、お前は美しい」と口走るほど素晴らしい時が体験できたら地獄に落ちてもいいのだと。両者は合意し、契約を結ぶ。

▶アリア「野原から、牧場から」(ラルゲット、3/4拍子、へ長調)はファウストをテノールに変更した改訂版で新たに作曲された。高音に効果をもとめる比較的単純な歌は、成功を勝ち取るための妥協の産物と思われる。悪魔の自己紹介となる奇怪なアリア(アレグロ・フォコーソ、6/8拍子、へ短調)は独創的で、プロローグの第2楽章で語った拒否の口笛を、このアリアでピーピー吹き鳴らす。契約が成立し、2人が歌う二重唱(アレグレット)にはカバレッタの名残がある。

## 第2幕

**第1場 〈庭〉** エンリーコと名乗るファウストは純朴な娘マルゲリータを口説く。メフィストーフェレはもう一人の娘マルタを口説き、2組は庭を行き来する。「神を信じ

ていますか」という娘の問いをはぐらかし、ファウストは心を感動で満たすべきだと相手を誘惑する。そして母親を眠らせて夜を一緒に過ごそうと、娘に眠り薬の入った薬瓶を渡す。ちなみにマルゲリータの清純さは改訂によってかなり犠牲にされた。

▶オーボエと弦楽器が夜の静けさを伝える。2組の恋人たちの対話が交互に展開する(マルゲリータとファウストは2/4拍子、マルタとメフィストーフェレは3/8拍子)。やがてファウストが甘美な誘惑の歌(アンダンテ・ソステヌート)を聞かせ、最後は恋人たちが軽やかに戯れる四重唱になる。

**第2場〈魔女の夜会〉** ブロックン山に魔女たちが集まってくる。メフィストーフェレとファウストは鬼火の飛び交う急な山道を上る(鬼火の二重唱)。魔女と悪魔たちの奇妙な合唱と踊りの後、メフィストーフェレは彼らの王者として中央に座す。彼はガラスの球体を受けとると、それを地球に見立てて人間たちの愚かさを笑う(バラータ「これが世界だ、空虚で丸い」)。魔女たちが狂ったように踊る。遠くの中に突然マルゲリータの幻影が現れる。鎖につながれ、首を切断したような血の跡にファウストは動揺するが、メフィストーフェレは人を惑わす幻影だと断じる。魔女たちの踊りはますます激しさを増す。

▶半音階を多用した不思議な前奏で始まる。「鬼火の二重唱」はアレグレット・コンモート、2/4拍子。メフィストーフェレのバラータ「これが世界だ」は広い音域を上下する奔放な歌。この場面では魔女と悪魔の合唱が大活躍するが、とりわけ場面を締めくくる「地獄の狂騒とフーガ」(アレグロ・フォコーゾで始まり、次第にテンポを上げていく)の効果が目覚ましい。なおエレナとマルゲリータは同じソプラノが歌う。

**第3幕〈マルゲリータの死〉** マルゲリータは母親を毒殺し、ファウストとの間に生まれた赤ん坊を溺死させたことで罰を受け、投獄されている。錯乱してひとりごとを言う(アリア「あの夜、海の底に」)。ファウストはメフィストーフェレの助けで監獄に入り込み、彼女を救出しようとする。初めおびえていたマルゲリータもやがて落ち着き、遠い島へ行行って幸せに暮らすことを夢見る(二重唱「遠くへ、遠くへ」)。しかし夜明けが近づき、メフィストーフェレが彼らを急かしくると、マルゲリータは逃げることを拒絶し、「聖なる父よ、お救いください」と祈りながら死ぬ。天から「彼女は救わ

れた!』という声が響き、ファウストとメフィストーフェレは逃亡する。

▶マルゲリータの劇的なアリア「あの夜、海の底に」は比較的単純な手法で効果的に書かれていることもあり人気がある。続くファウストとの二重唱はとても劇的だが、途中、ボローニャ改訂版(1875年)で挿入された「遠くへ、遠くへ」はこのオペラで最も静かな美しさを湛えている。1876年の改訂(ヴェネツィア)で書き加えられたマルゲリータの歌「夜明けの薄明かりが」は複雑な転調を繰り返すが、やがて「聖なる父よ、お救いください」と祈るところで天上のプロローグ〔第1楽章〕で聞いた天使の合唱の主題が響く。

**第4幕 〈古代の魔女の夜会〉** 古代ギリシャの土地アッティカのペネイオス川のほとり。ファウストは花畑に眠り、月光に照らされた美女エレナが侍女パンタリスと真珠貝の船に乗って歌う(二重唱「静止した月が天空を照らす」)。ファウストは愛を感じて興奮するが、メフィストーフェレは「古代」が性に合わないらしく、聖歌隊の穏やかな歌と踊りに退屈する。エレナはトロイ戦争の幻におびえる。騎士姿のファウストが進み出て愛を語ると、エレナの心も愛に満たされるので人々は驚く(合唱付二重唱「まさしく理想の姿」)。二人は洞窟で一緒に暮らそうと手に手をとって茂みの中に消える。

▶二重唱「静止した月が天空を照らす」(アンダンティーノ、6/8拍子、変ホ長調)はハーブの伴奏をもち、「ホフマンの舟歌」に類似した幻想的な雰囲気を持つ。エレナがトロイ戦争の幻影に襲われる部分は、音楽の伝統的な形式を離れて言葉に忠実に音楽が付されていて、ワーグナーの影響が濃厚に感じられる。続くエレナとファウストの二重唱「まさしく理想の姿」(アンダンテ・アモローゾ、3/4拍子)は「古典主義」と「ロマン主義」の出会いともとれるが、ファウストの情熱的なフレーズに引かれるように、後半では完全なユニゾンになり、後のヴェリズモ・オペラ風の展開を見せる。

## エピローグ

〈ファウストの死〉 再びファウストの職場。聖書の前でファウストはいま見た夢に思いを巡らせている。その様子を見守っていたメフィストーフェレはもう一度彼を誘惑しようとする。しかしファウストは言う。人生の終わりに来た今、多くの人々

の幸せを祈るという至高の夢を見て自分は幸せなのだ(アリア「**最期の時を迎えて**」)。焦ったメフィストーフェレはファウストを再び連れ出そうとするが、そこへ天使たちの合唱が響く。メフィストーフェレは懸命に愛を思い出させようとするが、ファウストはむしろ天使の合唱に感動し、「去り行く聖なる時よ、生まれ、お前は美しい!」と叫んで息絶える。賭けに負けたメフィストーフェレは悔しげに口笛を鳴らし、天使たちはファウストの魂を天国に引き上げる。

▶管弦楽の前奏は、最初は全3音(悪魔の音楽)を多用して不安定だが、やがてト長調の美しいメロディ(アモローソ、3/4拍子)に変化してファウストの愛の追憶を暗示する。ファウストの「**最期の時を迎えて**」は単純な形の効果的なアリア(アンダンテ・ソステヌート、4/4拍子、変イ長調)。メフィストーフェレが「あなたを楽しませた愛の歌を聞きなさい」とファウストを誘惑するところでは第4幕のエレナとの二重唱のユニゾンが再現される。最後にはプロローグ[第1楽章]の主題を再現する天使たちの大合唱が、悪魔の不満の声をかき消してしまう。

[原作] ヨハン・ヴォルフガング・ゲーテ『ファウスト』 [台本] アッリーゴ・ボーイト  
 [作曲年代] 1867年 [初演] 初版:1868年3月5日、ミラノ・スカラ座にて作曲者自身の指揮による/改訂版:1875年10月4日ボローニャのテアトロ・コムナーレにて。  
 [楽器編成] ピッコロ、フルート 2、オーボエ 2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット 2、バス・クラリネット、ファゴット 2、ホルン 4、トランペット 2、トロンボーン 3、チューバ、ティンパニ、打楽器(大太鼓、トライアングル、タムタム、グロッケンシュピール、チューブラーベル)、ハープ 2、オルガン、弦楽 5部、混声合唱、児童合唱/バンド(舞台裏):ホルン 2、トランペット 2、トロンボーン 2、打楽器(サンダーマシン)

おばた・つねお/昭和音楽大学教授、NPO日本ヴェルディ協会理事長。「音楽の友」「レコード芸術」などで音楽評論活動を展開。著書に『ヴェルディ(作曲家・人と作品)』『ヴェルディのプリマドンナたち ヒロインから知るオペラ全26作品』、訳書にニコラーオ『ロッシーニ 仮面の男』など。